

批判的記号論立脚的研究の近年の諸論調

—ケネディとスレッドゴールドの所説を中心に—

大橋 昭 一

I. 序——本稿の課題

記号論立脚的研究では、近年、研究領域を拡大する試みが盛んである。それは2つの方向でなされている。

その1つは、記号論研究の端緒をなすソシユール (Ferdinand de Saussure), パース (Charles Sanders Peirce), グレマス (Algirdas Jullien Greimas) などの試みを、全体的には“レプレゼンテーションショナル (representational) な理論”としてとらえ、その枠組みを拡大して、“ノン・レプレゼンテーションショナル (non-representational) な理論”もしくは“レプレゼンテーションショナル以上の (more-than-representational) 理論”を確立しようとするものである。

今1つは、記号論的研究の適用される対象領域を拡大しようとするもの、もしくはこれまでの研究領域のさらなる深化・拡充を図ろうとするものである。前者をいわば縦方向における進展の試みというならば、後者は横方向における進展の試みといえる。

本稿筆者では、前者についてすでに別稿 (大橋, 2019a) で考察した。本稿は後者について論究を試みるものである。ただし本稿では、その中でも批判的立場にたつものを対象とし、社会科学全般的領域について批判的法学研究 (critical legal studies: “cls”) の立場から論究を展開しているケネディ (Duncan Kennedy) の2001年の論考「批判の記号論」(Kennedy, 2001) と、批判的記号論研究で著名なスレッドゴールド (Terry Threadgold) の1986年の論考「記号論: イデオロギー: 言語」(Threadgold, 1986) を中心に、近年の研究動向を明らかにすることを課題とする。

II. 批判的記号論立脚的法学研究の立場からの論調

ケネディの2001年の論考は、正規のタイトルでは、上記のように「批判の記号論」としかなくないが、ケネディ自身の本文中の注釈によれば、「批判的法学研究のラング理論」(theory langue of critical legal studies) とよばれるものであり (Kennedy, 2001, p.1147), かなり広い意味で、つまり本稿筆者のみるところでは社会科学全般にかかわる広い意味で、問題が論究されているも

のと解される。それは、端的には次の点にみられる。

すなわちケネディは、同論考で論究するものを次の4つの理論系譜 (genealogies) とし、しかもそれらは、「広義にとらえられた批判的思考」 (critical thought broadly conceived) と規定されるものとしている。カッコ内の氏名は、ケネディが代表的論者として挙げているものである (Kennedy, 2001, pp.1147-1148)。

- ① 有機体論 (organicism : ヘーゲル, ラスキン, パーソンズ),
- ② 律法不要論 (antinomianism : キルケゴール, ニーチェ, サルトル),
- ③ 一事強調的構造主義論 (paranoid structuralism : マルクス, フロイト, フーコー),
- ④ 記号論 (semiotics : ソシュール, レヴィ=ストロース, デリダ)。

この場合これら4者には、それぞれ合理主義的理論 (rationalist) と非合理主義的理論 (irrationalist) とがあるとされているから、さしあたり8つの理論系譜があることになるが、さらに、これらのものは相互に影響し合い、合同的なもの (the set) に合体することがありうる。これらには、ケネディによると3つの場合があり、それにより独自の理論系譜が生まれることがある。故に理論系譜は11になる。合体的な3つの場合は、次のものである (Kennedy, 2001, p.1149ff : 構造主義論は、ここの原文では単に “structuralism” としか表記されていないが、“paranoid structuralism” を指すものと解されるので、そのように補足して示してある。以下同様)。

- ① [律法不要論・記号論] 対 [有機体論・(一事強調的) 構造主義論] (antinomianism & semiotics vs organicism & structuralism),
- ② [(一事強調的) 構造主義論・記号論] 対 [有機体論・律法不要論] (structuralism & semiotics vs organicism & antinomianism),
- ③ (例えば律法不要論と(一事強調的) 構造主義論が有機体論批判となる場合で) [批判の一時的結論 (the temporal sequence of critiques) であるもの]。

以下では、これらのものについてケネディの所論を考察する。

(1) 有機体論

ここで有機体論とは、ある単位体が1つの全体とみなされつつ、究極的にはより大きな全体の部分と考えられるものをいう。すなわち「有機体論とは、1つの全体とみなされるもの(個人など)が、より大きな全体の部分とみなされる方がより有効 (better) とするもの」 (Kennedy, 2001, p.1149) であり、有機体論における見解の違いは、主として(より大きな全体としての)有機体の内的構造 (internal structure) と集団のダイナミズム (dynamism of groups) についての考え方の違いから生まれるが、これについての合理主義的理論は、定義的にいえば、有機体が客観的データの上にたち、例えば自然的淘汰 (natural selection) に基づく進化論的発展のモデル (evolutionary model) としてとらえられるとするものである。

こうした有機体の合理主義的理論は、ケネディによると、①自然的秩序の土台が文化 (culture)

にあるとする考え方と、②それがメカニカルな有機性（mechanically organic）にあるとするものに分かれる。前者は人類学（anthropology）が妥当する。後者には大別すると次の3者がある。①自然淘汰論、②一般均衡システム論（general equilibrium systems）、③インプット／アウトプット論（input/output systems）である。ここでは一般均衡システム論とインプット／アウトプット論について管見する。

一般均衡システム論には、経済領域のもの（economic version）と、現象学的（phenomenological）な一般均衡論とがある。前者についてケネディは、次のように論じている。すなわち経済的一般均衡論は、すべての価格について、他のすべての価格、消費者使用価値（use value）および当該商品コストの関数ととらえるものであるが、これは、ソシュールの記号の価値の理論（theory of the value of a sign）と関連づけられるものであって、「用語（the word）は、価格が当該商品と関連づけられる（associated）と同様な形において、当該用語の概念（the concept）と関連づけられる。・・・（というのは）あるシステムにおけるそれぞれの用語の意味は、当該システムにおける他のすべての用語の意味に依存するからである」とする。そしてこれに基づき以下のようなテーゼが成立するという（Kennedy, 2001, pp.1147-1148）。

- i) 用語（word）＝ 価格（price）。
- ii) 言語（language）＝ 価格システム。
- iii) 用語の概念に対する関係は、価格の商品に対する関係に相当する。
- iv) 記号の現実に対する関係は、商品価格の使用価値および生産コストに対する関係に相当する。
- v) ある商品価格は、他の商品価格の関数（部分的な場合もある）である。
- vi) ある用語の意味は、他の用語の関数（部分的な場合もある）である。

以上の提議は、本稿筆者のみるところ、何よりも価格が記号の1つであることを証したものという意義をもつ。他方、現象学的な一般均衡論についてケネディは、フッサールの試みをよしとし、それは要するに、ワルサスの経済的一般均衡論とソシュールの記号理論で曖昧な点として残されている点をカッコ内に入れて、一般均衡論をとにかく完成させたものと位置づけられるという（Kennedy, 2001, p.1152）。

インプット・アウトプット論についてケネディは、①構造的機能主義（structural functionalism）、②認知システム（cognitive systems）、③学習システム（systems that learn）、④自動的生産システム（autopoietic system）の4者を挙げているが、ここでは構造的機能主義についてケネディが、これは要するに「システムの部分が1つの全体のように見えるが、それぞれの部分は、当該システムが全体として再生産されるような機能を果たすよう、内部的に区分されているもの」と規定しているところを紹介しておく（Kennedy, 2001, p.1154）。

以上に対し、有機体の非合理主義的理論は、有機体を例えば自由自発性（spontaneity）やバイタリズム（vitalism）に依存するものとし、その内的構造や進路は科学的に決まる法則などでは説明できないとするものである。こうした有機体の非合理主義的理論はケネディによると、①

ロマン主義的懐古主義的な有機体論 (romantic devolutionary organicism) と、⑥弁証法的形態発展論 (dialectical transformation) とに分かれる。ここではロマン主義もヘーゲル弁証法も非合理主義的有機体論とされていることが注目される。

(2) 律法不要論

律法不要論は、一言でいえば、「人間生活では律法に頼ることなどはできない」という考えにたつもので、「人間は、道徳的政治的アクターとして選択行為をするとき、その選択行為を統治しているなんらかの原則があって、それに基づいてその行為が正当化されるようなものではない。というのは、その原則は、それに従おうとする際には、本質上 (in the nature), 相互に矛盾するものであったり、有効性がないものであったりするからである。故に人間は、靈感 (inspiration) や直観 (intuition) に頼らなくてはならない」(Kennedy, 2001, p.1158) というものである。

もっともこれは、正確には、律法不要論でも非合理主義的理論をいうものであるが、ケネディによると、律法不要論の特性を最も端的に示すものとされている。換言すれば、律法不要論は、本性上、非合理主義的理論たるものであるが、合理主義的理論としては次のように提示されている。

例えば他人の行為について悪と判断するような場合、その判断は、当該の他人がもっているであろう律法によってではなく、別の人間のものである律法によって行われている場合が圧倒的に多い。判断の基準が異なるのであるが、通常このことが十分に考慮されない。通例の行為でも、相手が一種の戦略的な行為をとるような場合には、こうした食い違いが起こることが多い。

この上にとってケネディは、非合理主義的な律法不要論がみられる例として、カリスマ的指導者の場合を挙げるとともに、合理主義的なそれのさしあたりの例として、とりわけニーチェを挙げ、ニーチェのような考えにたつと、ナチスのヒトラーのような人物を生むことになること論じている (Kennedy, 2001, p.1161)。

この場合ケネディは、合理主義的な律法不要論の形態として、ポスト・ニーチェ形態である“決定主義” (decisionism) を挙げ、それに関して“選択の決定主義と決定不足” (underdetermination), “友人と敵との二重性, すなわち対話と戦略の二重性” (friend/enemy diad = dialogic/strategic diad), “決定主義と殺人” (murder) および“法律 (law) における律法不要論”の4者について論じている (Kennedy, 2001, pp.1162-1169)。

(3) 一事強調的構造主義論

ここで一事強調的構造主義論とは、現代における社会的および個人的な心理に関係するものについて究明するものの中でも、理論や主張の中心点を次の点におくべきとするものである。それは、力の行為手段 (playthings of forces) の中には、その存在と真の諸関係がわれわれの世

界のノーマルな (normal) 状況を否定するよう働くものがあることを指摘するところにある、とするものである (Kennedy, 2001, p.1169)。

これは、例えば、望ましくない (unwanted) ものがどのように生み出されるかを問うものといっているが、ケネディによると「通常、われわれは、われわれにとって悪 (bad) であるものに対し、自由に対処するようにしているのであり、啓蒙されるまでは、われわれ自身や他人を信じる事ができないでいる」というものである。これは、4つの論点に分かれる (Kennedy, 2001, p.1169ff.)。

第1は、「マルクス・フロイト並行論」(Marx/Freud parallelism)で、冒頭においてケネディは、「私 (ケネディ) は、資本主義社会の核心部分とそこにおける相互作用についてのマルクス主義理論と、現代における心理 (psyche) のそれぞれの部分とそこにおける相互作用についてのフロイト理論との間には、強い並行関係があることについて感銘を得てきた」とし、次のようなテーゼが成立するという (Kennedy, 2001, p.1170ff.)。

- ① (フロイト理論の) イド (id) のエゴ (ego) に対する関係は、(マルクス主義理論における) プロレタリアートのブルジョアジーに対する関係に相当する。ブルジョアジーとエゴは、プロレタリアートまたはイドを抑圧するとともに、それに依存する。
- ② エゴは、抑えがたいコンフリクトと防御機構を使って闘う。ブルジョアジーは同様なコンフリクトを持ち、イデオロギーを使って闘う。
- ③ スーパーエゴ (superego: 上位自我) が許されざる罪悪行為を差し止める働きをすると同様に、ブルジョア社会でも財産等を守るための法律があり、必要に応じて武装権力が発動される。以上を定式化すると、次のようになる。

- i) プロレタリアート=イド,
- ii) ブルジョアジー=エゴ,
- iii) 形式的ブルジョアジー法律=スーパーエゴの命令,
- iv) ブルジョアジー+エゴ的抑圧,
- v) ブルジョアジーのプロレタリアート搾取=エゴのイド・エネルギーに対する依存性,
- vi) ブルジョアジー・イデオロギー (例えばリベラル的理論) =エゴ防御機能。

もっとも、こうしたマルクス説とフロイト説との並行論は、それほど珍しいものではない。例えばアルチュセール (Althusser, L.) も同様な主張をしている (Althusser, 1971, cited in Threadgold, 1986, p.39)。

第2は、ケネディが一事強調的構造主義論における「合理主義的理論対非合理主義的理論」とよぶものである。これは、マルクスとフロイトについては科学主義 (scientism) に立脚するとされているものであるから、合理主義的理論という側面があることに基くもので、合理主義的理論と非合理主義的理論の両側面をもった一事強調的構造主義論がありうることをいうものである。

第3の論点は、「一事強調的構造主義論は社会理論では共通してみられるものである」(the

paranoid structural paradigm is common in social theory) ことをいうが、さらに第4の論点として「一事強調的構造主義論には有用性 (uses) がある」が提起されている。これはこの項の結論的テーゼで、ケネディは、新しい一事強調的構造主義論的分析が、われわれ自身について展開されることが望ましい。ただしそれは、知性的なモデル (models of intelligibility) として提起されることが肝要と論じている (Kennedy, 2001, p.1175)。

(4) 記号論

ここでは、合理主義的理論としてソシュールと、ゲシュタルト心理学で有名なケーラー (W. Köhler, 1947) が挙げられ、記号論理論系譜の出発点になるものはソシュール説であることが提議されるとともに、他方では、ゲシュタルト・モデルが肝要とされている (Kennedy, 2001, p.1175)。

ゲシュタルト・モデルについて次のように論じられている。「知覚は、常に、かつ必ず、個々別々の知覚 (perceptual fragment) から、全体としての概念的なものに飛躍することによって作用する。ただしこの飛躍は、合理性以前のもの (prerational), あるいは合理性のないもの (arational), もしくは実線で結ばれているもの (hardwired), または有機的な (organic) 性質のものである。・・・(故に) 問題は、個々別々の刺激、すなわち言葉 (words) やイメージが、意識において1つのまとまった記号 (the full sign) となるところにある。というのは、このプロセスは、意識的に論理的に行われるものではないからである。その際の解釈的行為は、人間理性のコントロール外にあるものである」というのである。

それ故、次のようなことが起きるといふ。すなわち、「ある1つの記号は、本来は、1つの個片的なもの (one fragment) にすぎないが、それが1つの全体 (one whole) あるいはそれ以上のものとして表象される」ことである。ケネディによると、ここにゲシュタルトの意義がある。さらに重要なことは、これによって間接的な言及 (allusion), 例えば暗にほめかすようなことが可能になることである。それ故“ありもしない全体 (an absent whole)”といったものが提示されることになる。

このことは、ソシュール説では選択 (selection) と組み合わせ (combination) の問題であるが、ゲシュタルト形成の際には、“コントロールできないもの (uncontrollably)” が生まれることを提起しているものである。

この上にとってケネディは、「部分対全体のとらえ方において、“ソシュール記号論・ゲシュタルト心理学”の方法は、(前述の) 有機体説とは反対のものである」。というのは、(有機体説では) ある1つの全体はより大きな全体との関連においてその意味が決まると考えられているのに対し、この(ソシュール/ゲシュタルト心理学説では)「1つの全体は、部分を呼び込むこと (bidding) によって成立する」と考えられるからである (Kennedy, 2001, p. 1176)。

さらに、“合理主義的な記号論理論系譜”の第2段階として、“言語/ゲシュタルト・モデルの一般化” (generalizing) というテーゼが提起される。これは要するに、以上と同様な原理的状

況が、これ以外の言語などの分野にみられることに適用したもので、その例としてロシアのヤーコブソン (Jakobson, R.) などに代表されるいわゆる形式主義 (formalist)、ラカン (Lacan, J.) などの所論、そしてバース (Barthes, R.) の有名なデイノテーション (denotation) / コノテーション (connotation) の説などが取り上げられている (Kennedy, 2001, pp.1176-1178)。

そしてこれらに対し、“記号論の非合理主義的理論”として、“ディコンストラクション (deconstruction: 脱構築) の理論”が挙げられている。これは要するに、ツ・マン (de Man, P.), デリダ、バトラー (Butler, J.) らの提起している旧来的記号論の過激的な根本的変革 (radicalization) の主張をいい、「合理主義的記号論の前提に対する批判」と位置づけられるものであり、次の3つのテーゼで示されるとされている。

第1のテーゼは、「人はその意味するところを、所詮、語るができないし、語ることで意味することができない」である。第2のそれは、「記号を生み出すことは、世界的規模で行うことをいうものである」である。第3のそれは、「レプレゼンテーションはレトリック (rhetoric) であるが、テキスト上では余分なドメインはない」というものである。

ケネディが挙げる4つの理論系譜については以上とし、次に3つの合同的なものを考察する。ここではそれぞれが1つの理論系譜であることを考え、上記につづいて通し番号で示してある。

(5) [律法不要論・記号論] 対 [有機体論・(一事強調的) 構造主義論]

ここで直接的に論じられていることは、律法不要論では、有機体論が倫理理論や社会理論などで合理主義的結論になることを批判していることである。同様に記号論は、(一事強調的) 構造主義論が自らを科学的なものと称していることを批判している。この点に基づくと、次のテーゼが成立するという (Kennedy, 2001, p.1184)。

i) [律法不要論対有機体論] + [記号論対(一事強調的) 構造主義論]

= 内的批判系譜, すなわち全体的論理 (genealogy of internal critique: totalizing logic) は “誤った必然性” (false necessity) (のテーゼ)

(6) [(一事強調的) 構造主義論・記号論] 対 [有機体論・律法不要論]

この等式では、次のテーゼが成立する (Kennedy, 2001, p.1186)。

i) [(一事強調的) 構造主義論対有機体論] + [記号論対律法不要論]

= 明らかに普遍的であるか自発性立脚であるものに対する批判の系譜, “信用されない隠蔽された論理” (genealogy of “discreditable hidden logic” critiques of apparently universal or spontaneous) (のテーゼ)

(7) 一時的結論的テーゼ

i) 「誤った必然性としての必然性批判 (necessity critiqued as false necessity)」 (のテーゼ)

- ① 「律法不要論対有機体論」
- ② 「記号論対 (一事強調的) 構造主義論」
- ii) 「隠蔽された論理志向性としての自発性 (バイタリズム) 批判 (spontaneity (vitalism) critiqued as subject to an hidden logic) (のテーゼ)
 - ① 「(一事強調的) 構造主義論対有機体論」
 - ② 「記号論対律法不要論」
- iii) 総括的一時的結論 (temporal sequence)
 - ① 「理性の覚醒」 (disenchantment of reason)

②記号主義論 (semioticism) 対 $\left\{ \begin{array}{l} \text{(一事強調的) 構造主義論} \\ \text{律法不要論} \end{array} \right\}$ 対有機体論対記号主義論

(8) 若干の付記

以上の所論についてケネディは、以下のように付記している。「フーコーは (一事強調的) 構造主義論者であるが、他の (一事強調的) 構造主義論者に対して内的批判を展開している主たる論者である。他方、“科学化すること” (scientificity) は、マルクス主義とフロイト派の信用されざる理論のいわばスローガンである。しかし、マルクスの『ユダヤ人問題』の論考や商品の物神性についての分析は、“誤った必然性” に対する批判としては、19世紀で最も輝かしいものである。同様に、(一事強調的) 構造主義論も、さらにいうまでもなく律法不要論や記号論も、“誤った必然性” 批判 (さらに“信用されざる隠蔽された論理” の批判も含めて) の方向をもつものである」(Kennedy, 2001, p.1186) と評している。

ここでは本稿筆者としては、次の点のみを指摘し、ケネディ説のレビューを終わるものである。それは、ケネディが商品の物神性を理論的に完成させたマルクスの功績を高く評価していることである。というのは、本稿筆者では、フェミニズム記号論で堅持されている、例えばヴォーン (G. Vaughn) による“ギフト関係→商品関係論” (Vaughn, 2004; cf. 大橋, 2019c) からいっても、現代資本主義社会における記号支配社会の原点は、商品の物神性にあると考えるからである。

ちなみに、現代社会における記号の意義については、アメリカのバーガー (A. A. Berger) のように、すべての事象は今や記号としてとらえられるから、少なくとも社会的な事象はすべて記号論的に解明されると主張するものがある一方 (Berger, 2011, p.107)、カナダのスミス (S. L. J. Smith) のように、記号論的理論の代表的論者としてフーコーやデリダの名を挙げ、こうした考え方は要するに解釈主義 (interpretism) であって、物語り的な主観的な誤謬に陥ることを回避できないと批判しているものもある (Smith, 2017, pp.28-30)。さらにスミスは、批判理論に対して、真の意味における理論 (theory) といえるものではなく、一群の人たちに共通の1つの

見解 (a view) にすぎないというべきものであると評している (Smith, 2017, p.30)。

ケネディの所説については以上とし、次にスレッドゴールドのイデオロギー分析を中心にした所論を取り上げる。これは、スレッドゴールドによると、総括的には「批判的社会的記号理論」(critical social semiotic theory) といわれるものである。

Ⅲ. イデオロギー概念の分析を中心にした批判的記号論研究

——「批判的社会的記号理論」の概要——

スレッドゴールドは、その論考の冒頭において自らの序文の代わりに、トムソン (J. B. Thompson) の著『イデオロギー理論の研究』(Thompson, 1984) から次の文を引用している (cited in Threadgold, 1986, p.15)。ここに、スレッドゴールド論考の意図するところの大意が示されていると考えられる。トムソンは次のように書いている。

「イデオロギーは、どこか上から人々に課せられているまとまった考え方というものではない。そうではなく、むしろ、人々の日常的なディスコース的な生活において支配諸関係 (relations of domination) の意味が行きわたるようにする一連の複合的なメカニズムを通して作用するものである。それ故、イデオロギーとは何かを究明する場合には、イデオロギーが表明されているディスコースの諸形態についての分析方法とリンクされることが絶対に必要である」。

この上にとってスレッドゴールドは、イデオロギー概念を中心にした分析を展開しているが、その分析の基本的枠組みをスレッドゴールドは「批判的社会的記号理論」とよび、同論考の実質上最後において、いわば同論考の結語的総括のように提示している (Threadgold, 1986, pp.44-45)。しかし本稿筆者のみるところ、これは同論考論述の枠組みを提示したものという位置にあり、本稿ではその大要を最初に提示しておく方が有用と思われる。故にまず、これを考察する。

(1) スレッドゴールド説の立脚点—「批判的社会的記号理論」の概要

この理論は、スレッドゴールドによると、定義的には、「特定の言語的実現状態 (specific linguistic realization) と、全体社会的秩序におけるディスコース的な構成 (discursive constitution) との弁証法的関係に関する諸問題を解明することを課題とするが、次のアプローチ方法をとる。すなわち、現在の社会的、記号論的、言語的な諸理論に内在しているところの二重性 (dichotomies)、つまり主体対客体、文章の (literal) 対画像的 (figurative)、レファラン斯的 (referential) 対社会的文化的実体という二重性を分析する (relocate) ことに志向するものであるが、これらの二重性は、イデオロギーおよび主体性 (subjectivity) の社会的ディスコース的な構造に対し、(社会的) 闘争の過程で働く力関係 (power relations) を動かすことができるような形がかかわっているものである」(Threadgold, 1986, p.44)。

ただしこの理論は、テキストをベースにしたものであり、それは多様なディスコース的現実

を構成している意味論的分類システム (the systems of semantic classification) をモデル化することを可能にするものである。しかしこの場合のアプローチは、言語を論理的分析の形式的な対象とみるようなものではなくて、コミュニケーション行為を社会的ディスコースの諸形態と考えるものである。そこには社会的活動を維持し規制するものがあり、社会におけるステータスと力関係が示されているものと考えるのである。

それ故「知ることと信じること、そしてわれわれがイデオロギーとよぶところの知識と信念のシステムの構築は、その性質、起源、機能において社会的記号論 (social semiotics) で解明されると提議される。それらは交互作用的なコンテクストにおいてディスコース的に生み出されるものであるから、コンテストされ、変化する」。

従って社会的記号システムには、内部のもの (inside) と外部のもの (outside) という区別はない。このプロセスにおけるすべての要因 (elements) は、システムの組織のあらゆるレベルにおいて、参加的観察者を含め、他のすべての要因の表象 (interpretant) としてとらえられる。ちなみにこの点について、スィボール (P.J.Thibault) は、次のように規定している。「人間において知識や確信として現れるところのシステムと、それにより生まれる社会的実践行為とは、まさしく関係システム (the system of relations) に基づきなされるものであり、かつ、それを変化させるものである。というのは、それらは関係システムの部分をなすものであるからである」(Thibault, 1986, cited in Threadgold, 1986, p.45)。

こうした考えにたてば、少なくとも17世紀以降において生まれたところの上記の二重性分化、すなわちマクロレベルとミクロレベル、社会的なものとの個人的なもの、主体と客体、文章的なものと画像的なものという分化を、単にディスコース上だけではなくて、実際に復元させるものは、この方法と解されると、スレッドゴールドは締めくくっている。基本的には資本主義的生産関係が問題というのである。

「批判的社会的記号理論」の概要は以上とするが、これはレッドゴールド説の総論的なものとすれば、以下は各論的なものといえる。

(2) イデオロギー研究の状況

ここではスレッドゴールドは、言語についての記号論とイデオロギー論の研究方向(directions)について論究することを課題として挙げている。その際イデオロギー研究にとって特色となることについて、スレッドゴールドはいくつかの点を挙げている。

まず第1に、記号論は本来、意味が社会的システムの中でいかに生まれるかについて研究するものとされているが、しかしこのことは、これまでのすべての記号論研究には当てはまらなかったという。なぜならば、記号論者や言語論者の中には「意味とコンテクストと実際の姿 (realization) との間における決定的な関係を究明することをしないもの」があったからである。

つまり、記号論の主流をなしてきたものでは、言語について「ディスコース分析の用具と考

えるよりも、メタフォール（metaphor：隠喩）の手段としてとらえ、その結果、“実体から離れたシグニファイアー”（disembodied signifier）の提示に役立つようなものになっていたり、イデオロギーがディスコース上あるいは言語上の形態となんら関係なく存在するという考え方に貢献するようになってきたものがあった」（Threadgold, 1986, p.15）からであるという。

第2に、イデオロギーという言葉や概念については、この言葉がフランスで最初使用されたころから、あるいはマルクス／エンゲルスの論述においても、いわば一方的にネガティブな内容の言葉（negative connotation）となってきたことが、とにかく特色である。しかしスレッドゴールドは、これは否定するだけでいいというものではない。現にあるものである。しかしそれは「私の声ではなく、他人の声（the voice of the other）である」ことが肝要と指摘する。

故にそれには、“誰が主体（subject）か”という問題があり、主体の客体（object）に対する問題がある。それ故にイデオロギーの研究は、社会に関する研究にとって中心的位置を占めるものであり、批判的な社会的立場にたつ記号論研究は必ずたち向かわなくてはならないものであるが、ところが、イデオロギー研究が言語やレプレゼンテーションの研究で取り上げられるようになったのは、ごく最近のことである、と論じている。

第3にスレッドゴールドは、その場合知っておくべきことに、イデオロギー研究の記号論では、単に記号や記号の固定的な意味などだけを念頭においたそれよりも、内容がはるかに豊かなものになるであろうということがある、と提議している。

以上の上にとってスレッドゴールドは、イデオロギーという言葉は、通常的には2つの意味で用いられているという。1つは、イデオロギーを観念もしくは信念の体系（systems of ideas or belief）あるいはシンボリックな行為（symbolic practices）にとらえるもので、どちらかといえば広く遍在的なもの（ubiquitous）である。今1つは、“支配と不均等的力関係（domination and asymmetrical power relations）の維持に不可欠なもの”とみるもので、一般に否定的なもの、批判が必要なものと位置づけられているものである（Threadgold, 1986, pp.16-17）。

ただしこの両者は、スレッドゴールドによると、相互に排除し合うものではない。そして両者ともに、マルクス主義で主張されているような、イデオロギーは誤った意識（false consciousness）といった考え方は、これを否定するものである。故にこれは、言語を通じて社会的相互作用に影響を与えるものととらえられるべきものであり、現実を構成し再生産するあらゆる部分に及んでいるものと、規定されるべきものとする。ここにはイデオロギーの定義がなされているものと解されるが、この上にとってイデオロギー研究では、主体の研究から始められるものとする。

(3) 主体について

スレッドゴールドによると、こうした研究は、旧来の個別的学問領域を超えた、一種の学際的研究を必要とするが、とにかく記号論の枠内で考えると、それは“批判的立場をとる社会的

記号論” (critical social semiotic theory) というものになる。ただし具体的形態を考えると、イデオロギー研究は、政治的なもの (political) だけではなく、それが流布され作用する方法 (the way) も大きな問題であるから、これまでの研究から考えると、さしあたりまず“フィルム理論” (film theory) が論究対象になるという。

「言語、イデオロギー、主体との間の関係が初めて広範に論議されたのは、フィルムのテキストや実践に関連した研究においてであった」。そしてそれは、本稿後述のクリステヴァ (J.Kristeva) はじめ多くの論者に影響を与えたものであった (Threadgold, 1986, p.19)。

記号論の考え方からすると、すでにレヴィ＝ストロースやバースなどによって、記号では、単に現実が反映されるだけではなく、意味が付け加わる、あるいは生み出されるという考え方が提起されていた。こうした考え方にたつと、(記号論でいう)シグニフィケーション (signification) は (単に「意味する」だけではなく)「意味の造出」ということを含んだものになる。従っていわば記号の意味の根源であった「私」というものはなくなり、他のもの、すなわちなんらかの主体の現れることが必要になる。

この主体は、本能的なもの (instincts) や、フロイト説でいうイドではなく、フィルムにおけるレプレゼンテーションとシグニフィケーションの機能に基づくものである。これを提起したものは、一般的にはラカン説に依拠したメッツ (C. Metz) の論文「仮想的シグニファイアー」(Metz, 1975) といわれているが、イデオロギーにかかわってこれを論じたものには、すでに1971年のアルチュセールの論文「イデオロギーとイデオロギー的国家装置」(Althusser, 1971) がある。

そこでアルチュセールは、あらゆるイデオロギーの働きは、当該主体がどのようなものかによって決まると論じ、イデオロギー・ディスコースが作用するプロセスにおいて応答するもの (interpellation) とよび、歓呼する主体 (hail subjects) と名づけている (cited in Threadgold, 1986, p.20)。しかし、これらのラカン説に基づき総括されるところの主体のとらえ方は、スレッドゴールドによると、要するにすべてが基本的には家父長的な見解にたつもの (patriarchal) で、イデオロギーもそうしたもの、すなわち家父長的イデオロギーのものにとらえられる。

しかしその後、史的唯物論による解明も現れ、ここにおける問題の主体は、イデオロギーが作用する機構 (the mechanism) と解される見解も提起された (Threadgold, 1986, p.20)。史的唯物論によると、主体は歴史的に規定された生産様式 (mode of production) ということになるが、スレッドゴールドによると、これに対していえば、一般的にいう主体 (the subject in-general) についてどのようにして形成されるかという問題意識の理論によっては、歴史的に特定された主体が特定の社会構成体において歴史的に特定のイデオロギーとしてどのように機能するかについて、十全たる説明はなされてこなかった。つまり「主体形成 (subject formation) の理論は、こうした史的唯物論的理論の必然的部分であるが、しかしその十分な形成は、まだなされていない」(Threadgold, 1986, p.21)。

そこでスレッドゴールドは、これは男性本位的なもの (phallogocentric) という見解を取り上げ、

そして歴史的にはイデオロギーは、本質的にこのような性質のものであったということは理解できるが、今日のそれをもこのようなものとして理解する理由はないとする。すなわち「家父長制は、女性にとって不可避的なもので取り消しできない宿命的なものでは、決してない」と宣しているが、他方では、これが例えばクリステヴァ説 (Kristeva, 1974) において、イデオロギーに対する闘いではいわゆる前衛的闘争 (the avant-garde) が必須なものとして位置づけられているゆえんであろう、と論じている (Threadgold, 1986, p.21)。

この上でスレッドゴールドは、フィルム理論にかかわって、(個々の) テキストとその読み手という特定の例をもって、主体についての普遍的な理論が説明されると考えるのは困難である。しかしこの点を別にして、“テキスト—読み手”の関係について、これを他のすべての社会的かつ歴史的な構造などから切り離し、それだけのものとして解することは可能である。しかしそれは、要するに経験論 (empiricist) の枠内のものであると評している (Threadgold, 1986, p.21)。つまり、社会的理論的な観点が必要、というのである。

(4) 社会性観点のとらえ方

ここではスレッドゴールドは、まず、「イデオロギーはシグニファイアーにおいて、すなわちテキストにおいて、客観的に存在すると考えられるもの」というテーゼを提起し、しかしこれは、フィルム映像などの現実化 (realist) によりかえって無意識的なもの (unconscious positionings) となることによって、制約されたもの (constrained) になると規定する。故に「これだけでは、言語、記号現象 (semiosis) と主体との間の関係を説明するには、単純すぎるもの」とする。

ただしこのことに基いて、ディスコースの多義性が起こるとする。故に、例えばボロシノフ (v. N. Voloshinov) により記号のアクセント多義性 (multi-accentuality) が唱えられ (Voloshinov, 1930)、これにより例えばディスコースは、“争いの場” (arena of struggle) であること、そしてそれは結局、支配的イデオロギーの独演場 (monologism) になることが指摘されていることを紹介し、「支配階級は、記号を単一アクセント性 (uniaccentual) のものとするよう試みている」(Threadgold, 1986, p.23) と提議している。これは、スレッドゴールド説の指導基線とっていいものである。

ただしこの場合スレッドゴールドは、そうだからといって、イデオロギーを階級一点張りのものとみる考え方は狭量すぎると主張している。スレッドゴールドは、この点について、階級と、記号の意味体系との間には確かに有力な関連があるが、しかしこれについては、ジェンダーや家父長的な関係、人種 (race) や民族性 (ethnicity) などといった要因も作用していると考えらるべきであると主張している。もっともこの場合、こうした諸要因を含めたものを“広い社会的政治的意味における階級” (class in a broadly social and political sense) ということではできると注釈している (Threadgold, 1986, p.25)。

この上にとってスレッドゴールドは、レムケ (J. L. Lemke) がミクロレベルの理論でマクロレベル理論を形成するのが困難であるのは、そこにはイデオロギーが作用するからであるとし

ている (Lemke, 1985) ところを紹介し、記号論についても個々のシグニファイアーの研究とシグニファイニング・システムの研究とは異なるものとするのが相当としている (Threadgold, 1986, p.28)。

なお、ツーリズムにおいても社会的記号論 (social semiotics) の考え方が必須であることが、2015年にもハッサン (H. Hassan) により唱えられている (Hassan, 2015)。

スレッドゴールドに戻ると、スレッドゴールドは以上の上において、記号論の基本的立脚点の1つであるディノテーションとコノテーションの問題について論じている (Threadgold, 1986, pp.28-31)。

(5) 記号の2つのレベル：ディノテーションとコノテーションについて

この問題を本格的に提起したのは、周知のように、バースであるが、その試みは、スレッドゴールドのみるところ、少なくともコノテーションでは、その時や所によって作用するイデオロギーが異なることがありうることを見逃したものと総括されるものである。バース説は通例的記号論理論の一部を成すものとされているが、こうしたものは、スレッドゴールドによると「有用性がない (untenable)。何故ならば、そこにはイデオロギー関連的なシグニファイニング論がないからである」。ただしこの点については、アルチュセールのように、バース説はあまりにも一義的であるが故に、支配的イデオロギーの再生産に適応したものである、という見解もある (cited in Threadgold, 1986, p.30)。

これに対してスレッドゴールドは、「記号というものは、定義上、イデオロギー的なものであるが、その意味は次の点にある。すなわち、この世界を言語上で機能的に再生産するという点で問題はないというのではなく、ディスコースにおいてどのような社会的アクセントが支配的なものになるかについての闘いがある、という点である。…ただし少なくとも言語についていえば、それとイデオロギーとは同じものではない。故に、イデオロギーについては、それを例えばディスコースなどにおいて見出すことが必要なのである」(Threadgold, 1986, p.30) と論じている。

(6) “もの言う主体” について

“もの言う主体” (speaking subject) は、周知のように、クリステヴァのフェミニズム論などで唱えられ、知られたものであるが (詳しくは大橋, 2019c)、ここではクリステヴァ説についてのスレッドゴールドの論評のみを取り上げる。スレッドゴールドはまず、「クリステヴァの著作は高い関心の持たれるものである。というのはそれは、言語、イデオロギー、主体性に関する論議に影響する他の重要な領域、例えばフェミニズムや、男性的および女性的なディスコースの問題とリンクしたものであるからである」(Threadgold, 1986, p.30) と評している。

そしてつづけて、「クリステヴァは“シグニファイニング実践” (signifying practices) について新しい概念を樹立した。それは“理解の跳躍” (leap of understanding) といわれるもので、(記号

について) 新しい意味が生まれることをいうものであるが、それは当該フェミニズム主体が一種の内的危機 (inter crisis) の状態に投入されていること」をいうものであり、スレッドゴールドによるとそれは、ボロシノフによるマルクス主義的展開、すなわちイデオロギーを社会的主体 (social subject) の形成の際における物的な力 (material force) と規定するものと根本的に同趣旨のものとされている (Threadgold, 1986, p.40)。

(7) 若干の付記

イデオロギーとは何かという問題では、ドイツのノエト (W. Nöth) が2004年の論考 (Nöth, 2004: 詳しくは大橋, 2018) で展開しているものが啓発的と思われる。そこでノエトは、イデオロギーという言葉が初めて使用されたのは1976年、フランスの哲学者、ヅ・トラシ (A.L.C.D. de Tracy) によってであるが、ヅ・トラシは、人間は官能主義的に (sensualism) 動くものであり、その根源の1つがイデオロギーであると規定し、現代社会ではなにかんづくマスメディアにより、単なる表示的な (denotative) メッセージに加え、二次的な記号システムとして含蓄的な意味のもの (connotation) が送出されるようになってきていることを指摘し、これをイデオロギーとよんだ。

ノエトによると、これについてバースは一旦、“コノテーション=イデオロギー的なもの”、“ディノテーション=非イデオロギー的なもの”というテーゼを提起したが、最終的にはこれを放棄したといわれる (Nöth, 2004, p.17)。

しかし、ロッシ=ランディ (F. Rossi=Landi) がいうように、マスメディアによるメッセージの中には、一般大衆が生活上当然のこととして容易に受け容れるものがある一方、支配的イデオロギー的なものがある。多くの場合後者では、それが安易に、かつ広範に流布するよう量的に多くのものが送出される。すなわち「支配階級は、自分たちの立場を確立するこうしたメッセージを有り余るほどの量 (redundancy) で流布している」(cited in Nöth, 2004, p.19) ことは認められねばならないであろう。

こうした点からいうと、テレビ全盛時代という今日では、イデオロギーについては、映画を含むフィルム、すなわち映像の役割がさらに深く分析されるのが望ましい。ちなみにカナダ、レイクヘッド大学のゲノスコ (G. Genosko) は、2009年の著『フェリックス・ガッター』(Genosko, 2009) において、ガッター (Félix Guattari) の所説に拠りながら、いわゆる映画を次の3者に分けている (Genosko, 2009, p.134)。

- ① アメリカのハリウッドに代表される、アメリカ金融資本 (US finance capital) をバックとしたもの、
- ② ハリウッド的映画からの独立を自認しているが、実際にはそのミニチュア版となっているところの、いわゆる独立系的監督の作品 (オトゥール: auteur),
- ③ 発展途上国の諸事情をバックとしたもの。

しかしゲノスコは、この上で次のように総括している。すなわち、ガッターの所説では単純

にドキュメンタリー映画が可とされているのではない。・・・つまりガッターは、パラエティに富んだドキュメンタリーに強い関心を示してはいるが、しかしそこには、映画一般について認められるのと同じ問題点がある、すなわち、映画一般に見られるのと同じ問題点、および、映画スターの役割について批判すべき問題点があり、そしてそれらは“家族主義”(familialist)、つまり“エディプスコンプレックス”(oedipalism)を助長するものである。従ってそれらは、“改良主義的風潮”(reformist sentiment)を引き立て、結局、“反動主義的な反文化的志向にたつところの、具体的な事柄についての闘争放棄”(reactionary countercultural abdication of concrete struggle)に役立つものと位置づけられていると宣している (Genosko, 2009, p.139)。

IV. 結——まとめに代えて

以上においてケネディとスレッドゴールドの所論について大要を考察した。それぞれの所論についてのコメントは、それぞれの個所で述べている。ここでは、両所論に共通的なコメントを述べ、締めくくりとする。

ケネディとスレッドゴールドの所論では、それぞれの論究主題が異なる。ケネディの所論では、既述のように、社会科学全般にかかわる土台的な論点について、批判的記号論の立場からの解明が試みられている。これに対しスレッドゴールド説では、イデオロギーの解明を根本的問題意識として、これまでの記号論的研究の特徴が解明されている。

この場合、ケネディ説では“批判もしくは批判的”が指導原理になっているが、スレッドゴールド説では、さらに進んで、それは“社会もしくは社会的”になっていると考えられる。つまり、この2つの広い領域に及ぶ論究からいえば、少なくとも批判的記号論で先導的な論点になるものは、一言でいえば、“社会的立場に立脚した批判”というものであると考えられる。

こうした場合には、本稿筆者としては、その根本的土台としてなんらかの形でマルクス主義理論の考え方が、考慮されざるを得ないものになると考える。ケネディ説では、マルクス主義理論は“一事強調的な構成主義論”とされているが、その一方、マルクスの商品物神性論が現代社会における記号支配性解明の原点になるものとして高く評価されている。こうした点を含めていけば、今日において“社会的立場に立脚した批判”の試みは、なんらかの形や程度においてマルクス主義理論とは無関係に構築されることはできないと考えるべきものと思われる。

ちなみに、マルクスの『資本論』そのものについて記号的解明の可能なことは、少なくともキム (J. Kim) とコッケルマン (P. Kockelman) によって提示されている (Kim, 1993; Kockelman, 2006; 詳しくは大橋, 2015)。1993年にはアリゾナ大学のバーゲセン (A. Bergesen) により「記号論的マルクス主義」(Bergesen, 1993) の試みが提示されている。それによると、“記号論的マルクス主義”には次の4段階があるとされている (Bergesen, 1993, p.1)。

① (マルクス主義でいう) 土台 (base) と上部構造 (superstructure) の逆転 (inversion) の理論の

提起（例えばグラムシ）、

- ② イデオロギー的論理について、政治的論理に合流するよう下方的に拡大する試み（例えばアルチュセール）、
- ③ （こうして生まれた）イデオロギー的的分野の論理について、それを経済的分野の論理で吸収する形において拡大させる試み（例えばプーランツァス。ただしプーランツァスはいわゆる正統派マルクス主義に徹したという見解もある。例えばGlik, 1980。大橋注記）
- ④ 旧来のマルクス主義理論では社会構成体は生産領域における社会的諸関係を包括するものとされていたものを、新しいマルクス主義理論といわれるところの、次のものに作り変えるもの（recasting）、すなわち主体アイデンティティ（subject identities）の間における言語的諸関係（linguistic relations）から構成される“ディスコース構成体”に作り変えるものである。

これらは、一言でいえば、「上部構造の論理が全体としての社会構成体の論理になる」(Bergesen, 1993, p.1) ことをいうものである。著名なボードリヤールの試みなどは、要するに、こうしたものといえることができる（大橋, 2019b）。

もとより本稿筆者としては、こうしたマルクス主義の変容は認められないとする見解も多く、かつ極めて強いものであることは充分認識しているが、いわゆる情報化社会がさらに進んで、ポストモダンの記号論的思考全盛のイデオロギー社会とっていい状況を前にすると、現代における社会動向批判の根本原理としてマルクス主義原理の活用されることが望ましいと思料する。

ちなみに、イタリアのモデナ・レッジョ・エミリア大学のビアンチは、2015年にロッシ＝ランディの所説提起に関連し、「言語とコミュニケーションの分野に対してマルクス主義的原理を適用すること（application）は、今や、説明的にしても応用的にしても喫緊性（urgency）に満ち溢れた課題である。というのは、コミュニケーションで起きていることは、単に見ているだけでは済まされないものがあるからである」（Bianchi, 2015, p.15）と論じている。

〔参考文献〕

- Althusser, L. (1971), Ideology and ideological state apparatuses, in: L. Althusser, *Lenin and philosophy and other essays*, London: New Left Books.
- Berger, A. A. (2011), Tourism as a postmodern semiotic activity, *Semiotica*, vol.183, pp.105-109.
- Bergesen, A. (1993), The rise of semiotic Marxism, retrieved April 27, 2019, from:
<https://www.jstor.org/stable/1389439?seq=1>
- Bianchi, C. (2015), Ferruccio Rossi=Landi : Language, society and semiotics, *Semiotics of Economic Discourse (Ocula)*, no. 16, pp.1-24.
- Genosko, G. (2009), *Félix Guattari : A critical introduction*, New York: Pluto Press.
- Giddens, A. (1976), *New rules of sociological method : A positive critique of interpretative sociologies*, London: Hutchinson.
- Glik, M. (1980), Poulantzas and Marxism, *Theoretical Review*, no. 15, pp.1-12.

- Hassan, H. (2015), Social semiotics : Realizing destination image by means of cultural representations, *International Journal of Social Science and Humanity* vol.5, pp.149-153.
- Kennedy, D. (2001), A semiotic of critic, *Cardozo Law Review*, vol.22, pp.1147-1189.
- Kim, J. (1993), From commodity production to sign production : A triple triangle model for Marx's semiotics and Peirce's economics, paper presented at the Annual Convention of SCA : Miami, pp.1-24.
- Kockelman, P. (2006), A semiotic ontology of the commodity, *Journal of Linguistic Anthoropology*, vol.16, pp.76-102.
- Köhler, W.(1947), *Gestalt Psychology: An Introduction to New Concepts in Modern Psychology*, New York: Liveright.
- Kristeva, J. (1974), *La revolition du langage poétique*, Paris : Seuil. (原田邦夫等訳『詩的言語の革命』勁草書房)
- Lemke, J. L. (1985), Textual politics : Heteroglossia, discourse analysis and social dynamics : paper presented at the International Summer Institute for Structuralist and Semiotic Studies, Bloomington : University of Indiana.
- Metz, C. (1975), The imaginary signifier, *Screen*, vol.16, pp.14-76.
- Nöth, W. (2004), Semiotics of ideology, *Semiotica*, vol.148, pp.11-21.
- Smith, S. L. J.(2017), *Practical tourism research*, 2nd ed., Wallingford: CABI.
- Thibault, P. J.(1986), Thematic system analysis and the construction of knowledge and belief systems in discourse, unpublished paper.
- Thompson, J, B.(1984), *Studies in the Theory of Ideology*, Cambridge: Polity Press.
- Threadgold, T. (1986), Semiotics-ideology-language, retrieved April 27, 2019, from:
<https://openjournals.library.sydney.edu.au/iondex.php/SSSC/article/view/8715>
- Vaughn, G., Introduction to the gift economy, retrieved April 27, 2019, from:
<http://www.gifteconomy.com/theory.html>
- Voloshinov, v. N. (1930 : 1973), *Marxism and the philosophy of language*, trans. by L. Matejka and J. R. Titunik, 1973, New York and London : Seminar Press.
- 大橋昭一 (2015) 「経済理論における記号論的展開過程—構造主義的 (伝統的) な記号論を中心に」『和歌山大学・経済理論』381号, 83-102頁
- (2018) 「組織記号論と批判的記号論—最近における記号論拡大の2つの方向」『関西大学・商学論集』62巻4号, 157-185頁
- (2019a) 「最近における記号論拡張の進展過程—ツーリズム記号論基本原理研究の序章」『和歌山大学・観光学』21号, 15-25頁
- (2019b) 「ボードリヤールの批判的記号論をめぐる近年の諸論調—現代批判的記号論研究の一章」『和歌山大学・経済理論』396号, 83-102頁
- (2019c) 「フェミニズム記号論の最近の諸論調—特徴的な試みを中心に」『和歌山大学・経済理論』397/398合併号, 31-54頁